かけはし

NPO 千住文化普及会

NO. 6

平成１８年１２月１日
千住文化普及会発行
代表理事　�May原文夫
東京都足立区千住河原町29-5
遊学庵　〒120-0037
TEL／FAX：03-3881-3232
E-mail：info@basyoo.net
http://senjyu.mizubashou.com/

第三回　千住文化基礎講座　町歩き東西コース

十九日午後一時、あいにくの雨をついて、東武鉄道牛田駅前を出発。

直近の京成電鉄関屋駅に名を留める関屋の里を偲ぶ。隅田川に悪水を落とした堀跡、舟運盛んな頃の河岸への引込み線跡を見る。最近まで墨堤通りを横切る踏切があった。北千住に集中する鉄道網の変遷も興味深い。東武には中千住駅が、京成には千住緑町の分譲時、西千住駅があったという。東武、常磐、日比谷、つくばEXの各線のガードをくぐる。地下には千代田線が走る。映画館の名が残るミリオン通りを抜け、元区役所通り（熊谷堤）を慈眼寺へ。包丁塚を見て、国道四号線を渡り大師道を千住神社へ。大正道と行き交う所で森鴎外が撰文した大正道記念碑を見る。西新井への途中、元宿堰稲荷神社は葛飾北斎の冨獄三十六景「武州千住」が描かれた地と目される。千住のランドマークだったお化け煙突の跡地近く、千住双葉小（元宿小）に遊具として残された半円形の煙突の痕跡に触れる。小学校の統廃合でこの記念物の行方も危うい。帰路は三々五々柳町界隈を抜け、イトーヨーカ堂発祥の一号店前を通り、賑わいを見せる北千住駅へ。

＜お化け煙突の滑り台＞

雨の町歩き　東西横断に寄せて

千住の杉浦日向ぼっ子

二、三日前から天気予報は日曜の雨を報じていた。最近の当たらない予報への期待は朝からの曇天と寒さで消えてしまった。傘をさしながらの町歩きは辛いぞ、と心で唱え出発。

ここが悪水落とし、そうだよ！いつかあった踏切が無くなっている。ここで北斎が武州千住を描いたの？

歩き始めて二時間後、雨の中初めに唱えた文句もウキウキワクワクと変わっていた。冷たい身体を暖めようね、と恒例の懇親会へ。話はつきないけれど、また来月へ。講習会参加者の絆が深まった半日でした。

千住と奥州を結ぶ街道宿場町フォーラム

安藤昌益と千住宿を調べる会・足立史談会主催

千住桜小学校多目的ホールに二〇〇名の聴衆が集まり、満員御礼の札が出る盛況。

相川謹之助調べる会会長の挨拶に続き、同会の石渡博明チューターが、「なぜ千住から安藤昌益の稿本が出てきたか」という謎に迫る最新の研究成果について緊急報告。引続き安藤義雄足立史談会会長が千住の成立ちについて基調報告。赤坂憲雄福島県立博物館館長が旅学を提唱、他地域からの視点の重要性を説かれ、三浦忠司八戸歴史研究会会長が八戸と千住の参勤交代を通じた歴史的文化交流について、平田輝明小山市立博物館学芸員が小山宿の変遷と千住とのつながりについて報告された。

第二部では、昌益の「米の物神化」について、文化伝播のネットワークなどについて、会場の発言を交えたディスカッションがあり、参加者それぞれが持帰る物の多い実りあるフォーラムとなった。

【千住の酒合戦】〈舞台の気分は文人墨客〉

十二日午後、千住仲町協議会による「千住の酒合戦」再現イベントが、足立成和信用金庫駐車場にて開催された。同時に、隣接する産業芸術プラザでは、イベント広場に設置した陶板製の「てくてくマップ」の贈呈式も行われた。

今回は第三回目で、強風というコンデションではあったが、酒合戦の由来説明、酒肴の説明など実に手際よく、当時の文人墨客に扮した主催者陣も満足気。三味線が賑やかに囃し、太鼓の合図で、着付け教室のきれいどころにお酌されて大盃を干した参加者たちは大喜びであった。「千住住民にこだわらず、参加してくださる皆さんのご協力で盛り上げたい」（吉田鉄夫代表）というイベントに、当会もささやかながらお手伝いができた。「酒合戦」の由来などについては次号で詳しく報告する予定。

＜活動日誌　平成18年11月＞

- ●１日（水）「かけはし」５号発行
- ●２日（木）遊学庵／全体会／講座準備
- ●12日（日）千住酒合戦／協力参加
- ●19日（日）第３回［千住文化基礎講座］町歩き東西コース
- ●25日（土）遊学庵／第七回千住塾連句会
- ●26日（日）千住と奥州を結ぶ街道宿場町フォーラム／協力参加

長谷川浩平の千住事件簿　犯科帖５　千寿小の子ども達

仲町氷川神社の境内にあった池に亀を見に行くと、千寿小の子ども達に千二の生徒は来るなと脅された。浩平少年は「千寿学校ぼろ学校、あがってみたらぼろ学校」と言い返して逃げ帰った。千寿の子どもが旧道を通ると、源長寺に連れ込んで脅した。参道の入り口は、メンコ・ビー玉、石けりなどの遊び場だった。

その昔、千寿と千二の子ども達は縄張り争いをしていたのだ。悪態ついて囃したてる。言われたら言い返す。閉じられた空間の陰湿なイジメとはわけが違う。自然に生じた仲間意識は地域愛を育み、争っていた子ども達も長じて、お互い同じように大切なものを守っていた同士だと理解しあう。大きな声で明晰に話される長谷川さんの語り口が教えてくれるのだ。

それにしても境内に子どもの姿は見られなくなった。「やーいやーい」と始まる囃し声も聞かれない。子どもの声こそ天の声ではなかったろうか。

氷川神社の弁天池はとうになく、そのスペースは地下にもぐって防火槽となった。千寿小は芸大に代わり、遊び場を巡るライバル校は消失した。